

日本列島における渡来系遺物・遺構の考察

——革袋形須恵器を中心に

陳 永強 考古学分野・専門 博士前期課程2年

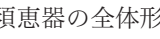
はじめに 「特殊須恵器」¹⁾の一種とされる革袋形須恵器²⁾は戦前からその特異な形状と用途不明であることで注目を集めてきた。多くの研究者による資料紹介が蓄積されているが、以下の事例については不明な点が多いため、実際のフィールド調査を実施した上で整理してみた。

鞍投窯跡 鞍投窯跡は佐賀県小城市に所在したが、開発で消滅したようである。『世界陶磁全集2』(1979)所収の小田富士雄氏による「九州須恵器」³⁾の一文の中に、「窯跡としては佐賀県鞍投窯跡がある程度である。ここでは、皮袋形土器の出現が注目される」の記述がある。また佐賀県立九州陶磁文化館の徳永貞紹氏によると、『三日月町史 上巻』(1985)の「三 古墳時代の遺跡の分布」⁴⁾の項目に「鞍投古窯跡」について簡単な記述と数点の出土品の実測図が掲載されている。さらに三島格氏の「肥後の須恵器資料(二)」⁵⁾では革袋形須恵器の出土地は「佐賀県三日月村織島・東分・鞍投所在の須恵器窯跡出土例」と記載され、「須恵器はⅡ及びⅢA式の焼損品と共に発見された」と指摘されている。こうした文献記録からみると、鞍投窯跡から革袋形須恵器が出土したことは確実なようである。

小篠原古墳 京都国立博物館に革袋形須恵器が所蔵されている。この資料はかつて梅原末治氏が、「大岩山附近古墳発見土器及び玉類」⁶⁾と題して、遺物のモノクロ写真を載せていた。野洲市歴史民俗博物館の鈴木茂氏から、「これは、野洲市の字大岩山を示していると思われる。現在の遺跡名での該当する遺跡・古墳群は、田中山古墳群、桜生古墳群、福林寺古墳群、山脇古墳群、大岩山遺跡と思われるが、いずれから出土したのかは不明である。過去に野洲市の職員が、梅原先生の資料を調査しており、そこには「近江國野洲郡大篠原古墳出土 知恩院造」と明記されている。このことから、梅原先生が上記の論文を作成されるまでに、出土地を大篠原から大岩山に訂正されておられることがわかるが、その訂正の根拠は不明である」と教示を頂いた。京都国立博物館の宮川禎一氏から提供された資料には、「小篠原古墳」という文言が箱に記載されており、「伝滋賀県野洲市小篠原出土」とされている。写真による観察では、色調は灰黒色、焼成堅致、頸部は短く、根元に直径4mmの穴が開いているが、出土後の穿孔かどうかは不明である。全体形状は紡錘形を呈し、器体には無規則の竹管文が施されている。法量は、口径6.2cm、高11.0cm、幅19.5cmである。

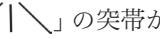
八幡山6号墳 八幡山古墳群は兵庫県美方郡香美町村岡区福岡にあり、6号墳は八幡山古墳群の最も西側に位置する円墳である。古墳の約29m西に木棺直葬とされる、墳丘径約7m、高約1mの円墳が陪塚として存在する。そして玄室は框施設を有する横口部に袖石を配置する両袖型プランの石室である。北西に開口し、


- 1) 柴垣勇夫(1987)「特殊須恵器の器種と分布」『愛知県陶磁資料館研究紀要』6、pp. 11-27、愛知県陶磁資料館。
- 2) 研究者によってその呼称は異なるが、一般的には「皮袋形提瓶」、「皮袋形瓶」あるいは「革袋形土器」、「革袋形瓶」と呼ばれることが多い。ここで「皮」か「革」かの用言定義については、「製袋に由来するのであれば、加工されていない段階の「皮」を使用するのは不適切で、なめし加工された「革」を使用すべきこと」を平林彰氏・牛嶋英俊氏が主張している(平林1996; 牛嶋2010)。その後、入江文敏氏が研究史的経緯から検討することで、「皮袋形」を使用した(入江2015)。本稿において、古代の手工業生産に近づけるために、用言の定義として「革」を扱い、加えて「皮袋形土器」(大塚・戸沢編1996)と呼ばれる土製品があることから、混乱を招かないように「革袋形須恵器」と呼ぶことにしたい。
- 3) 小田富士雄(1979)「九州の須恵器」『世界陶磁全集』2、pp. 227-233、小学館。
- 4) 三日月町史編纂委員会編(1985)『三日月町史』上巻、三日月町。
- 5) 三島格(1963)「肥後の須恵器資料(二)」『熊本史学』25、pp. 33-37、熊本史学会。
- 6) 梅原末治(1935)「栗太、野洲両郡に於ける二三の古式墳墓の調査報告(近江国に於ける主要古墳の調査録其二)」『考古学雑誌』12-2、pp. 147-160、聚精堂。

全長4.85mで4枚の天井石を用いた竪穴系横口式石室である⁷⁾。出土遺物は村岡民俗資料館まほろばに所蔵され、珠文鏡1、環頭太刀1、玉類、須恵器と土師器が出土した。これらの遺物から5世紀代から6世紀に遡る古墳とされる⁸⁾。革袋形須恵器の全体形状は台形状を呈し、胴部下部に「」の突帯が貼り付き、それに沿う形で半截竹管文が施される。環状の把手が付き、肩部にも半截竹管文が一回り施されている。口頸部と肩部の接合部は平面をなし、頸部はラッパ状のように外反し、口縁は端面をもち、外方に張り出している。法量は口径8.0cm、頸部高4.0cm、器高14.0cm、底幅20.1cmである。

成正寺の所蔵資料 北野博司氏は「第4節 特殊須恵器」⁹⁾の集成表に志雄町散田オハエ(ベ)古墳出土と伝える革袋形須恵器を提示した。この資料は現在、石川県宝達志水町の成正寺が所蔵している。筆者の実見観察によって、革袋形須恵器の胴部から底部にかけての破片であることを確認した。破片の胴部から底部にかけて3か所に突帯が貼り付き、それに沿う形で竹管文が施されている。断面からみると、胴部は膨らみをもって底部にナデ調整後に接合したようで、底部形状が直線的に緩やかに側面に向かって伸びていることから、全体形状は台形であった可能性が高いと考えられる。

岐阜市歴史博物館の所蔵資料 岐阜市歴史博物館に所蔵された革袋形須恵器はこれまで報告されていない。学芸員担当の吉田晋右氏によると、出土地は多治見市内出土と伝える。法量は、口径8.0cm、頸部高4.9cm、器高12.1cm、底幅22cmである。全体形状は「紡錘形」を呈し、胴部に突帯が貼り付き、それに沿う形で刻み目が施されている。底部の両端の重なり合ったところが垂れ下がっている。口頸部の作りは外反し、刻み目が施され、口縁に二重の端面をもち、外方へそのまま張り出させる。

愛知県陶磁美術館の所蔵資料 愛知県陶磁美術館に「稻荷神社出土」とされる革袋形須恵器が所蔵されている。法量は、口径8.2cm、頸部高5.0cm、器高18.6cm、底幅25.4cmである。全体形状は「扇形」を呈し、胴部上位から底部にかけて「」の突帯が貼り付き、それに沿う形で半截竹管文が施されている。両側の突帯が若干湾曲して、両端の底部に水平に向かって伸びている。頸部と胴部にかけて、かき目調整が見られる。

名古屋市博物館の所蔵資料① 名古屋市博物館に二個の革袋形須恵器が所蔵している。1点目の法量は、口径6.2cm、頸部高5.3cm、器高13.0cm、底幅24.9cmである¹⁰⁾。全体形状は「紡錘形」を呈し、肩部から垂直に2条突帯と、両裾に向かって八字状に各1条突帯が貼り付き、「」を表現している。竹管文は頸部と突帯に沿って不規則に施している。口頸部は内湾気味にほぼ直すぐ立ち上がる。

名古屋市博物館の所蔵資料② 『名古屋市博物館だより(1998)』の「新資料紹介」によると、二点目の革袋系須恵器には「大井」という文字が墨書きされており、外箱には「松江市朝酌町字大井野津古墳」というラベルが貼られている。ただし、「野津古墳」として広く知られている古墳は存在しないものの、該当する地域である松江市大井町には多くの群集墳が分布している¹¹⁾。この情報から、松江市大井町には複数の古墳が存在し、そのうちの 하나가「松江市朝酌町字大井野津古墳」として言及されている可能性が考えられる。革袋系須恵器は口縁部が欠けており、膨らみをもつ台形の形状をしている。全体には竹管文による刺突が不規則に施されており、突帯が胴部の上部に貼り付けられている。また、頸部を巻くように配置され、側面上部で交差している。頸部の下部には透かし穴が開いているが、これが出土後に穿孔されたものかどうかは明確ではない。法量は現存器高15.0cm、胴径21.3cm×12.5cmである。

おわりに 本稿では基礎資料の提示と整理に重きを置いているため詳細な分析はできず、課題を積み上げ

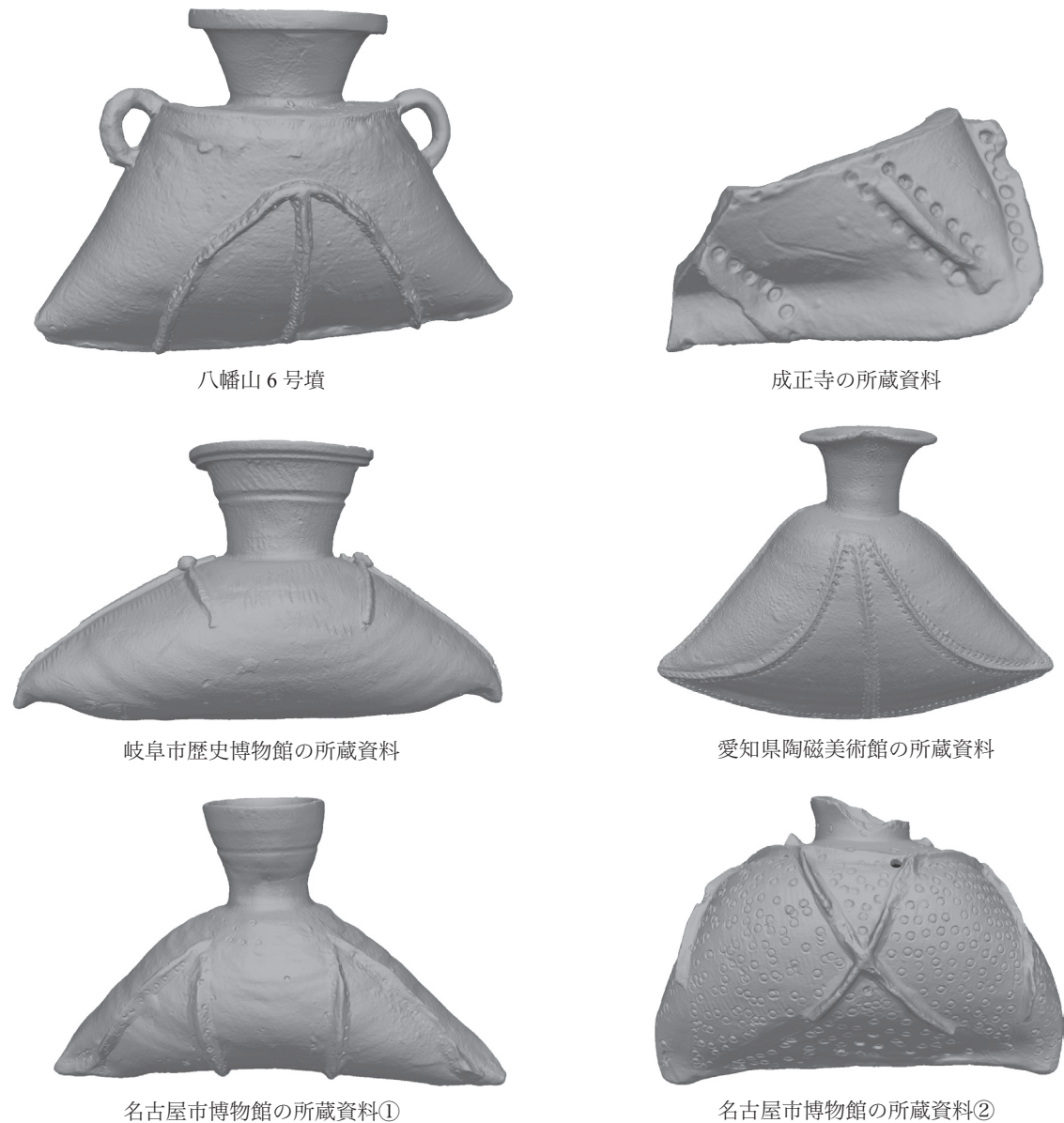
7) 大手前大学史学研究所・香美町教育委員会(2014)「八幡山古墳群」『兵庫県香美町村岡文堂古墳』13、pp. 261-265、大手前大学史学研究所・香美町教育委員会編。

8) 兵庫県教育委員会(1974)『兵庫県文化財調査報告書 史跡7八幡山古墳群』兵庫県教育委員会。

9) 北野博司(1997)「第4節 特殊須恵器」『祭祀具Ⅱ』pp. 47-49、石川考古学研究会。

10) 名古屋市博物館(1987)「20 須恵器 皮袋形瓶」『館蔵品図録Ⅱ』p. 150、名古屋市博物館。

11) 名古屋市博物館(1998)「新資料紹介」『名古屋市博物館だより』第122号、名古屋市博物館。



第1図 革袋形須恵器の三次元画像

るだけに終わってしまった。今後、より詳細な報告や資料化を進めつつ分析を行いたい。

参考文献

- 大塚初重・戸沢充則編 (1996) 『最新日本考古学用語辞典』 柏書房。
平林彰 (1996) 「長野県屋代高等学校所蔵の革袋形瓶」『長野県立歴史館研究紀要』2、pp. 72-78、長野県立歴史館。
牛嶋英俊 (2010) 「革袋形土器研究小史一附・革袋形土器集成」『同志社大学考古学研究会50周年記念論集』pp. 169-186、同志社大学考古学研究会。
入江文敏 (2015) 「特殊須恵器の分布とその背景」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』pp. 58-77、河上邦彦先生古稀記念会。

図版出典 第1図は、筆者が各所蔵機関から許可を得て、対象となる遺物の写真撮影に基づいて作成した三次元画像である。

謝辞

資料調査に際しては、各文化財機関の方々にはご高配とご教示をいただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。愛知県陶磁美術館、名古屋市博物館、岐阜市歴史博物館、京都国立博物館、九州陶磁文化館、野洲市歴史民俗博物館、村岡民俗資料館まほろば、宝達志水町教育委員会、成正寺
大西遼、富田航生、吉田晋右、宮川禎一、徳永貞紹、鈴木茂、石松崇、竹森杏奈、飛龍